

3 【出題の意図と対策】

俳句とその解説文の読解問題です。ここでは、松尾芭蕉の複数の俳句について、鈴木健一が解説を書いたものが題材になっています。限られた字数の中に、作者の一貫した姿勢や独自の視点を見出す俳句は、難解なものに感じられるかもしれませんが、解説をしつかりと読んで設問に答えましょう。

【解答】

- ① そろう
- ② ウ
- ③ I 生命のありかた
- II 平衡感覚を上手にとる
- III へりくだった気持ち
- IV 【例】そのまま受け入れようとする見方(15字)

【解説】

- ① ポイント《かなづかいの知識があるかどうか》
歴史的かなづかいの「ア段十う(ふ)」は、「才段十う」に直します。
- ② ポイント《文章の内容を正しく理解できるかどうか》
Xは、河豚汁をご馳走になったあと、芭蕉の中に湧き上がったきたと考えられる気持ちが入ります。後の部分に「死の恐怖といったものは日常のあれこれの中に隠蔽されていて、日頃はさほど感じないものなのだろうが、なにかのはずみに現れ出たりもする。この時、芭蕉もそうだったのかもしれない」とあることから、Xには「死の恐怖」に対応する語として、「不安な気持ち」が入ります。Yは、大体の人が、どのように思っただけを過ごしているのが入ります。直前の部分に「あまりに悲観的になっては到底生きていけない。だから」とあることから、Yには、悲観的ではない、すなわち、楽観的な考え方を表す語として、「まあ大丈夫だろう」が入ります。したがって、正解はウとなります。
- ③ ポイント《文章の内容を正しく理解できるかどうか》
Iは、解説文中に引用された俳句の共通点として、松尾芭蕉が何を見ているのかが入ります。解説文全体の内容から、「生と死」といったことばをキーワードとしてとらえ、解説文の最後の一文で用いられている「生命のありかた」という語をおさえます。IIは、「あら何ともなや昨日は過ぎてふくと汗」の句に表れている芭蕉の考えや思いが入ります。第七、第八段落で、この句は、人の生が「ふとした拍子に命を落とす」「あまりに悲観的になっては到底生きていけない」という「二つの極の間に成り立っていること」を表したもので、芭蕉の死生観を、「要は、平衡感覚を上手にとることなのである」とまとめられています。IIIは、「野ざらしを心に風のしむ身かな」の句に表れている芭蕉の考えや思いが入ります。解説文の筆者は、「河豚汁を詠んだ時にはまだ生と死の間で葛藤する気持ちが表現されていた」のに対し、「野ざらしを詠んだ時は、生死を超えたところにある何かを掴んでいる」と述べています。そのような「何か」に対する「芭蕉のへりくだった気持ちを読み取れる」という内容を読み取りましょう。IVには、「生きながら一つに氷る海鼠哉」に表れている芭蕉の生命に対する見方が入ります。この句は、「動物の身体を一個の物体として捉えよう」として、ここからは芭蕉の「死への甘い感傷」ではなく、「生命のありかたそのものをまるごと受け入れようとする透徹したまなざし」がうかがえる」と述べています。

4 【出題の意図と対策】

近年「読む」能力とともに、「話す・聞く・書く」能力の育成に力が入られています。入試においては、「書く」能力を判定する記述式の問題とともに、スピーチ・発表・話し合いなど、「話す・聞く」能力を判定する会話形式の問題も頻繁に出題されています。話し合い形式の問題では、話し合いのテーマや話し合いで主張されている意見とともに、問題で用いられている資料の意図も正確に読み取ることが大切です。普段から資料を使った問題などに関心を向けて、その内容や用いられている資料のポイントを頭の中でまとめる訓練をするように努めましょう。

【解答】

- ① 敗北
- ② エ
- ③ エ・オ(完答)
- ④ 【例】「資料Ⅲ」を見ると、「高校での部活動に、新しい種目・活動や、自分のペースに合った活動を希望している人が多い。だから、中学校の部活動は、活動や目的の多様性に対応できるようにするとよい。(80字)」

【解説】

- ① ポイント《対義語の知識があるかどうか》
「勝利」とは、競争において相手を上回る結果を得ることであり、「勝利」の対義語として一般的な語は、競争において相手に劣る結果となることを意味する「敗北」です。「敗戦」や「敗退」といった場合、試合のような限定的な場面に意味が限られ、より広い意味での「競争」という視点を欠いてしまします。
- ② ポイント《資料を論理的に読み取ることができかどうか》
「陽太さんの意見が論理的なものとなるために」という設問文の条件に注意する必要があります。陽太さんは、「資料Ⅰ」から読み取ったことをもとに、「勉強以外の活動に関して、生徒のニーズが多様化している」という考えを述べているので、その考えの根拠となる内容を考えます。Aは資料の読み取りとして不適切です。Iは資料の読み取りとしては適切ですが、陽太さんの考えの根拠としては不適切です。Uは資料の読み取りとして不適切で、学校の部活動と学校外での勉強以外の習い事を両立している人」の存在は、「資料Ⅰ」からは読み取ることができません。Eは資料の読み取りとして適切で、陽太さんの考えの根拠としても適切だと考えられます。
- ③ ポイント《発言の特徴を理解できるかどうか》
Aは、「明子は新聞記事の話題から自分たちの学校の話題に話を交える」という部分が不適切で、そのような発言を行っているのは陽太です。Iは、「運動系の部活動と文化系の部活動の違いを示す」という部分が不適切で、由美が述べているのは「目的意識」の違いであり、それは運動系の部活動にも文化系の部活動にも共通して存在するものだとして述べています。Uは、「自身自身の経験を照らし合わせながら」という部分が不適切で、雄大の二つ目の発言は、「資料Ⅱ」だけを根拠にしています。Eは、明子の二つ目の発言に当てはまり、「自分がやりたいことが学校の部活動ではできなかった」、「部の体質が合わずに退部してしまった」という発言は、陽太や由美の意見を受けたものだと考えられます。オは、陽太の二つ目の発言に当てはまり、それまでの話し合いの流れを踏まえて「学校外で有意義な活動ができる人は、その活動を続けていけばよい」という考えを述べた上で、「中学校の部活動の場をもっと有意義に活用していけるようにするためには、どういう案が考えられるかな」と、前向きな結論へ導こうとしています。

- ④ ポイント《資料を読み取り、論理的な文章が書けるかどうか》
「中学校の部活動の場をもっと有意義に活用していけるようにするため」の案を、「資料Ⅲ」からわかることを根拠として書きます。両方のグラフで最も多い「新しい種目・活動」という項目が、話し合いの中の「やりたいこと」という内容に対応していることや、両方のグラフで二番目に多い「自分のペースに合った活動」という項目が、話し合いの中の「目的意識」という内容に対応していることに着目するとよいでしょう。